

平成 21 年 6 月 2 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2006～2008  
課題番号：18592352  
研究課題名（和文）外来治療を受けるがん患者のエンパワメントを促進する看護援助モデルの構築  
研究課題名（英文）A nursing model to promote the empowerment of cancer patients in an outpatient setting in Japan  
研究代表者 片岡 純（KATAOKA JUN）  
愛知県立看護大学・看護学部・准教授  
研究者番号 70259307

研究成果の概要：外来治療を受けるがん患者の困難に対する取り組みを支援し、エンパワメントを促進する看護援助モデルの構築を行った。研究の第一段階では、外来治療を受ける患者の取り組みと看護援助を記述した先行研究の結果をメタ統合し、理論上の看護援助モデルを作成した。第二段階では、モデルの構成要素に含まれる下位項目から質問紙を作成し、外来治療を受けるがん患者 150 名を対象とした質問紙調査を行った。回答の統計処理により理論上の看護援助モデルの検証を行い、患者の取り組みを支援する看護援助を明示した看護援助モデルを構築した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,000,238	0	2,000,238
2007年度	800,682	240,000	1,040,682
2008年度	700,688	210,000	910,688
年度			
年度			
総計	3,501,608	450,000	3,951,608

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：看護学 がん 外来 エンパワメント

## 1. 研究開始当初の背景

近年、外来で継続的に治療を受けるがん患者が増加した。治療の場が外来に移行するのに伴い、患者は疾患による症状への対処や治療の副作用の自己管理を自律して行うことが必要となった。外来治療を受けるがん患者が

様々な困難に対処しながらエンパワメントの過程をたどり、自身の力で質の高い生活を送れるよう支援することは、外来看護師の重要な役割といえる。しかし、現実には患者に関わるゆとりのなさから十分な看護が提供できない葛藤を看護師が体験することが

明らかにされている。患者が直面する困難と、困難に対する取り組みについての看護師の理解を深め、患者のエンパワーメントを促進する看護を意図的に提供することが可能となるように、「外来治療を受けるがん患者のエンパワーメントを促進する看護援助モデル」の構築が急務であると考えた。

## 2. 研究の目的

外来治療を受けるがん患者のエンパワーメントを促進する看護援助モデルを構築する。

## 3. 研究の方法

本研究は2段階の研究で構成される。

第1段階（研究1）では、外来治療を受けるがん患者の体験する困難と困難に対する取り組み、その取り組みを支援し患者のエンパワーメントを促進する看護援助を内包する看護モデルを作成する。

第2段階（研究2）では、外来治療を受けるがん患者を対象とした質問紙調査を行い、研究1で作成した看護モデルの検証を行う。

### (1)研究1の方法

研究1ではメタ統合を方法論として用いた。

①対象論文：研究者らが作成した3つの博士論文、ならびに、1983年から2006年まで国内で発表され、外来治療を受けるがん患者の体験する現象あるいは外来治療を受けるがん患者に対する看護援助とその効果が実証された9つの原著論文を分析対象とした。

### ②分析方法

Patersonのmeta-studyを参考に以下の分析手順を作成した。

- ・対象論文を精読し内容の理解を深める。
- ・対象論文の研究結果から、外来で治療を受ける患者の体験と看護援助に関する研究結果を抽出し、一文に表現して分析単位とする。
- ・分析単位の意味内容の類似性と相違性を比

較検討して、類似する分析単位を統合し、内容を一文に表現してサブカテゴリとする。

- ・サブカテゴリ同士の内容が類似するものを集めてカテゴリとする。

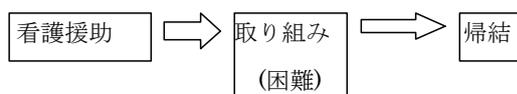
③カテゴリの精選と看護援助モデルの作成  
分析の結果、〈がん罹患と治療が患者にもたらす困難〉、〈困難への患者の取り組み〉、〈患者への看護援助〉、〈取り組みや看護援助の帰結としての患者の変化〉に分類されるカテゴリが明らかとなった。これらのカテゴリを精選するために、がん看護専門看護師1名を含み、外来治療を受けるがん患者の看護の経験のある看護師3名に、カテゴリ名の妥当性についてスーパーバイズを受け、カテゴリ名を意味内容がよりわかりやすい表現に修正を行った。その後、カテゴリ間の関係性を検討し、理論上の「外来治療を受けるがん患者のエンパワーメントを促進する看護援助モデル」を作成した。

### (2) 研究2の方法

#### ①質問紙の作成

研究1で作成した看護援助モデルのカテゴリに含まれる下位項目をもとに質問紙を作成した。「困難への患者の取り組み」、「看護援助」、「取り組みや看護援助の帰結」を構成概念とし、それぞれのカテゴリに含まれる下位項目から質問項目を作成した。困難に関するカテゴリは、患者の取り組みが発現するための前提として位置付け、質問項目数をおさえるために研究2の調査項目には6項目のみとした。

それぞれの構成概念から構成されるパス図は以下の通りである。



質問紙の精練過程で、外来治療を受けるがん患者の看護の経験がある看護師 24 名の協力を得て表面妥当性の検証を行い、質問文の修正を行った。質問紙は以下の項目から構成される。

- ・看護援助に関する項目 (24 項目)
- ・取り組みの項目 (24 項目)
- ・帰結の項目 (22 項目)
- ・困難に関する項目 (6 項目)
- ・人口統計学的変数 (性別、年齢、職業、発症部位、治療内容、発症からの期間、外来治療の期間)

## ②質問紙調査の実施

がん診療連携拠点病院等 4 施設を調査施設とし、これらの施設の外来 (化学療法センター、放射線治療センター) に通院するがん患者計 229 名に質問紙を手交配布し、郵送法で回収した。

## ③データ分析

まず、取り組み、看護援助、帰結の項目毎に探索的因子分析を行った。記述統計量の算出、因子分析には統計解析ソフト SPSS16.0J を用いた。初期解の推定には最尤法を用い、因子の回転としてプロマックス法を用いた。因子数はカイザーガットマン基準とスクリープロット基準に従って決定した。有意水準は 5%とした。次に、取り組み、看護援助、帰結の項目で、それぞれ因子分析により得られた因子を変数とし、重回帰分析を用いて変数間の関係を検討し、モデルの検証を行った。

## 4. 研究成果

### (1)研究 1 の結果

メタ統合の結果、①がん罹患と治療が患者にもたらす困難に関する 6 カテゴリー、②困難への患者の取り組みに関する 6 カテゴリー、③看護援助に関する 10 カテゴリー、④取り組みや看護援助の帰結としての患者の変化に関する 7 カテゴリーが明らかとなった。以下にカ

テゴリを説明する。

### ①がん罹患と治療が患者にもたらす困難

《がん罹患・再発の診断に向き合う苦しみ》、《現在と未来の不確かさ》、《がんに振り回される生活》、《治療の継続と自己管理に伴う負担》、《がんにつきまといわれる自分》、《一人で引き受けざるを得ない現実》の 6 カテゴリーが明らかとなった。

### ②困難への患者の取り組み

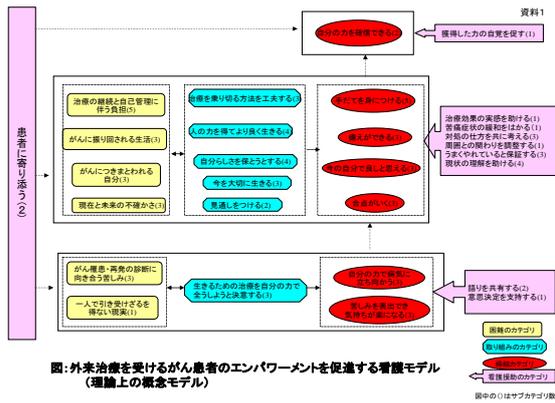
『生きるために治療を全うしようと決意する』、『見通しをつける』、『治療を乗り切る方法を工夫する』、『人の力を得てよりよく生きる』、『今を大切に生きる』、『自分らしさを保とうとする』の 6 カテゴリーが明らかとなった。

### ③患者の取り組みを支援する看護援助

[語りを共有する]、[患者に寄り添う]、[意思決定を支持する]、[治療効果の実感を助ける]、[現状の理解を助ける]、[対処の仕方を共に考える]、[うまくやれていると保証する]、[苦痛症状の緩和を図る]、[周囲との関わりを調整する]、[獲得した力の自覚を促す]の 10 カテゴリーが明らかとなった。

### ④取り組みや看護援助の帰結としての患者の変化

[苦しみを表出でき気持ちが楽になる]、[自分の力で病気に立ち向かう]、[手だてを身につける]、[備えができる]、[今の自分で良しと思える]、[合点がいく]、[自分の力を確信できる]の 7 カテゴリーが明らかとなった。上記のカテゴリ間の関係性を検討し、理論上の看護援助モデルを作成した (図 1)。



## (2) 研究 2 の結果

### ①対象者の概要

有効回答数は 150 (有効回答率 65.5%) であった。男性 57 名 (38.0%)、女性 90 名 (60.0%)、不明 3 名であった。職業のあり 55 名 (36.7%)、なし 95 名 (63.3%) であった。主ながんの部位は、乳房 51 名 (34.0%)、肺 18 名 (12.0%) であった。治療状況は、抗がん剤の点滴 123 名、放射線 34 名、ホルモン療法 10 名、抗がん剤の内服 8 名であった (複数回答)。

### ②看護援助・取り組み・帰結についての因子分析の結果

探索的因子分析を、看護援助・取り組み・帰結のそれぞれについて行った。その結果、看護援助では【治療に臨む姿勢を支える看護がある】、【対社会的生活に配慮する看護がある】の 2 因子が抽出された。取り組みでは【しっかり前向きな姿勢】、【医療者への信頼と相談】、【マイペースの生活】、【治療を続ける工夫】、【他者との比較】の 5 因子が抽出された。また、帰結では【自分への信頼と見通し】、【治療のある生活への適応】の 2 因子が抽出された。

各因子のCronbachの $\alpha$ 係数は、取り組み全 15 項目では 0.779、看護援助全 20 項目では 0.973、帰結全 10 項目で 0.875 であった。

### ③重回帰分析による分析結果

取り組み、看護援助、帰結の項目それぞれにおいて因子分析により得られた各因子において、該当する設問の得点を合計して因子の得点を算出した。まず、取り組みの 4 因子をそれぞれ目的変数として、看護援助の 2 因子を説明変数とした。次に、帰結の 2 因子をそれぞれ目的変数として、看護援助の 2 因子および取り組みの 4 因子を説明変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。統計学的有意水準は 5% とした。多重共線性は VIF にて判断した。

その結果、統計学的有意な関連が見られたのは、以下のとおりである。【治療に臨む姿勢を支える看護がある】に関連が見られたのは、【しっかり前向きな姿勢】(標準化重回帰係数、以下  $\beta=0.28$ ,  $P<0.01$ )、【医療者への信頼と相談】( $\beta=0.48$ ,  $p<0.001$ )、【マイペースの生活】( $\beta=0.31$ ,  $p<0.001$ ) であり、【対社会生活に配慮する看護がある】に関連が見られたのは【治療を続ける工夫】( $\beta=0.28$ ,  $p<0.01$ ) であった。

【自分への信頼と見通し】に関連が見られたのは、【しっかり前向きな姿勢】( $\beta=0.63$ ,  $p<0.001$ )、【治療を続ける工夫】( $\beta=0.16$ ,  $p<0.05$ )、【対社会的生活に配慮する看護がある】( $\beta=0.15$ ,  $p<0.05$ ) であり、【治療のある生活への適応】に関連が見られたのは、【医療者への信頼と相談】( $\beta=0.41$ ,  $p<0.001$ )、【しっかり前向きな姿勢】( $\beta=0.21$ ,  $p<0.01$ )、【治療に臨む姿勢を支える看護がある】( $\beta=0.24$ ,  $p<0.01$ ) であった。

VIF は最大 2.9 であり 10 を超えるものは無かったため、多重共線性はないと判断された。検証後のモデルを図 2 に示す。

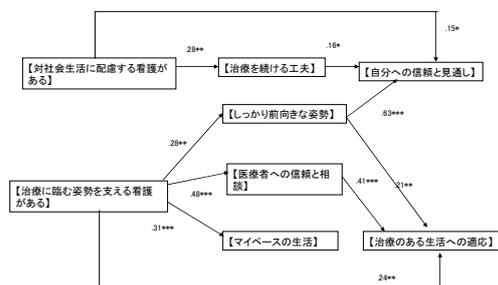


図2: 外来治療を受けるがん患者のエンパワメント促進する看護モデル(検証後)

本研究の結果、外来治療を受けるがん患者のエンパワメント促進する看護援助モデルが構築された。この援助モデルの活用により、がん患者の困難への取り組みのアセスメントが容易となり、意図的な看護援助の提供を行うことができると考える。今後は看護援助モデルの臨床適用について、検討を行う。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

①森本悦子, 外来治療を受けるがん患者のエンパワメントを促進する看護援助モデル, 第22回日本がん看護学会学術集会, 2008年2月, 愛知.

②Jun Kataoka, A nursing model to promote the empowerment of cancer patients in an outpatient setting in Japan, 14<sup>th</sup> international conference on cancer nursing, 2006.9, Canada.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

片岡 純 (KATAOKA JUN)

愛知県立看護大学・看護学部・准教授

研究者番号: 70259307

### (2) 研究分担者

水野 照美 (MIZUNO TERUMI)

佐久大学・看護学部・准教授

研究者番号: 90261932

森本 悦子 (MORIMOTO ETSUKO)

聖隷クリストファー大学・看護学部・准教授

研究者番号: 60305670

